

生花早満奈飛

七編

全

362

生花早子七編序

瓶花の事を知るに  
は世とちうと  
みやびと歌びと  
大正世に四の  
咲く千とれむ  
又其の一様  
中い多と成り  
けり



ふゆとんきば実もも枝ともくくむじ  
あればさそとふくむ人乃園く  
ふいふて千種花のみきと味いあ  
容も自くくくくくくくくくく  
ふんとけふふりのもくくくく

あふ申や

伊勢の

松長

土呂氏

ふく秋の中ふ

生花早満奈飛七編目録

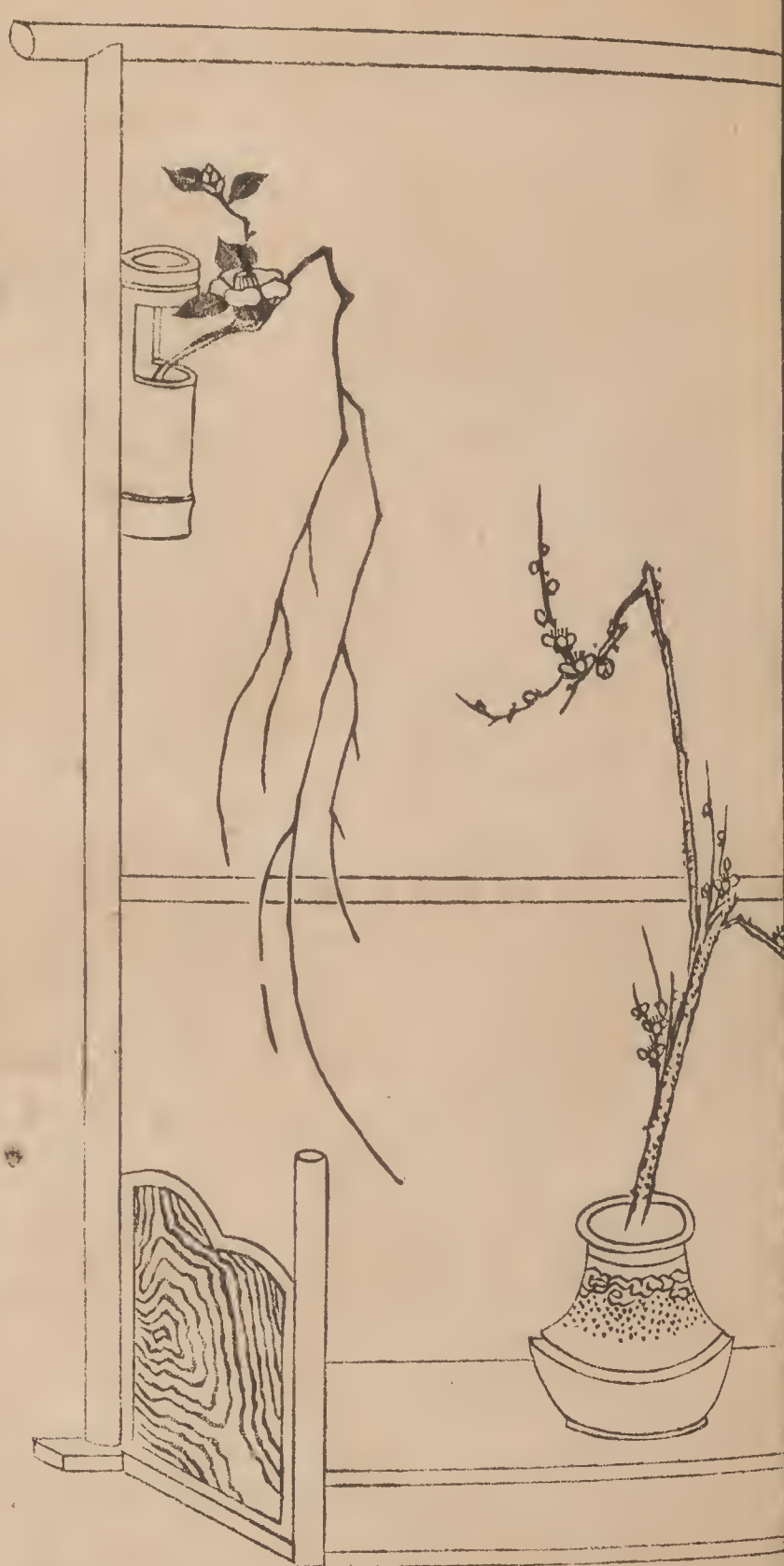
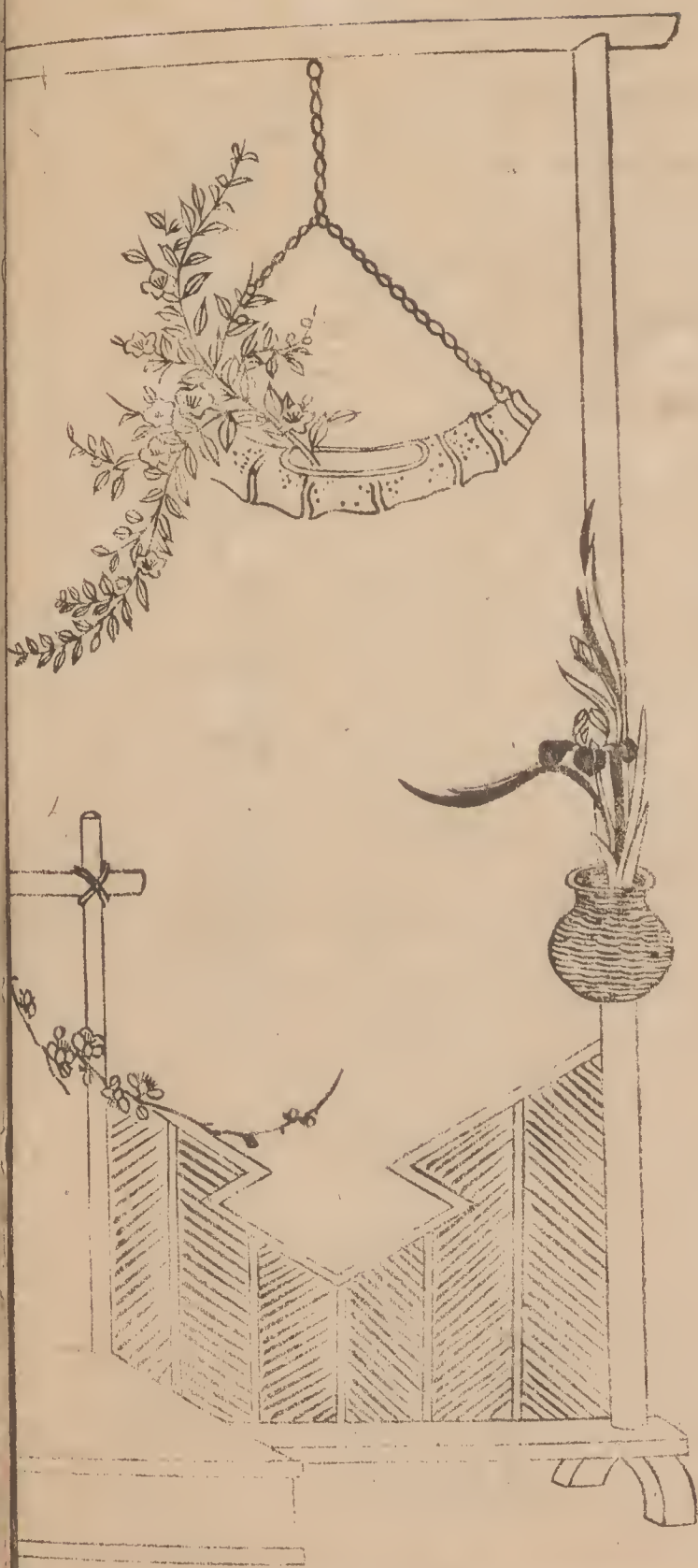
- 一 花衣拵花器飾方同拵方図式
- 一 菜萸囊花器之図 一 竹筒拵方心得葛葛纏様
- 一 竹筒名目切方寸法 竹筒七種飾附之次第
- 一 三重五重切方并五重切拵方図式
- 一 延附筒車僧筒の拵方一故人奇作の花形并諸説
- 一 草木上下の差別 峯花谷木之説
- 一 小柄笄壓尺鍔子鎖砂石留ふ之傳
- 一 銜組方十種之傳并図式



花衣拵畧図

立五尺 横五尺二寸

一書ニ此衣拵ハ石川流ノ用也ト云  
衣も花の拵方ハ種々の習ひ有之師よりて  
学ぶべしといふ只その大概とらんべし



○花とける習ひハ草木ともい何より山野水辺の出生小昔より

様心得る第一ハ陰陽四時の景色と宗に其根元の乱れざる事と

○花器ハ第一合と心掛し譬バ白と焼物の花瓶へ白の花と拵る

花器の拵方 花器の拵方 花器の拵方



時、面白く、又花瓶の長一尺、あふ木の長一尺五寸位、すては  
然きども品よりて、延するも有じ、其時宜し随ふて

○菊の座、第一と白く、第二、黄、第三と赤と定む

○早咲の花類、ひれと高く、蒼と低く、すて盛の時、節は、閑、蒼  
とも、取合へ、見繕ひ、すて、終の花、蒼高く、閑を低く、する事、閑と



衣拵のせうか

凡五瓶七瓶ト云

△見、び、心持、す、ひ、れ、と

ト、おれ、つ、び、と、上、し、け、と





同

此花衣折ハ未生流の図なり寸法あつび花器  
かざり付取扱花手ハホハ師よりて学ぶべし

いねきさふまの  
さくちげさげ  
おあうし

釣花の釘

左右を送る

心あつて

同上

同上

同上

掛花器のけりげさげ  
心あつて

初と在るの具のでてくる  
中ハ折花の具のけりげ  
すうとてせんがう

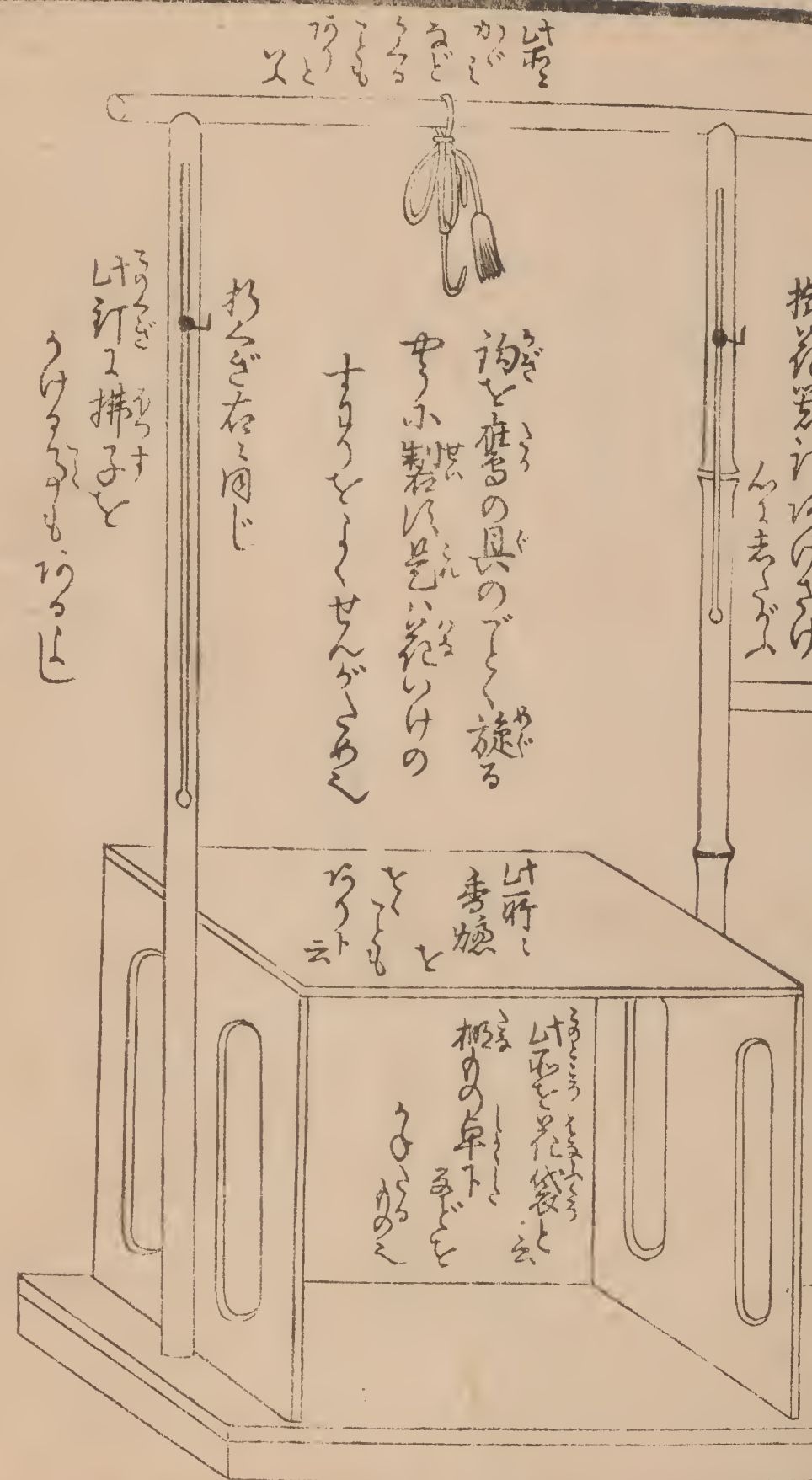
ねぎねと

けりげ  
けりげ  
けりげ

うけりげ

けりげ  
考  
うけりげ

けりげ  
初めの年  
うけりげ



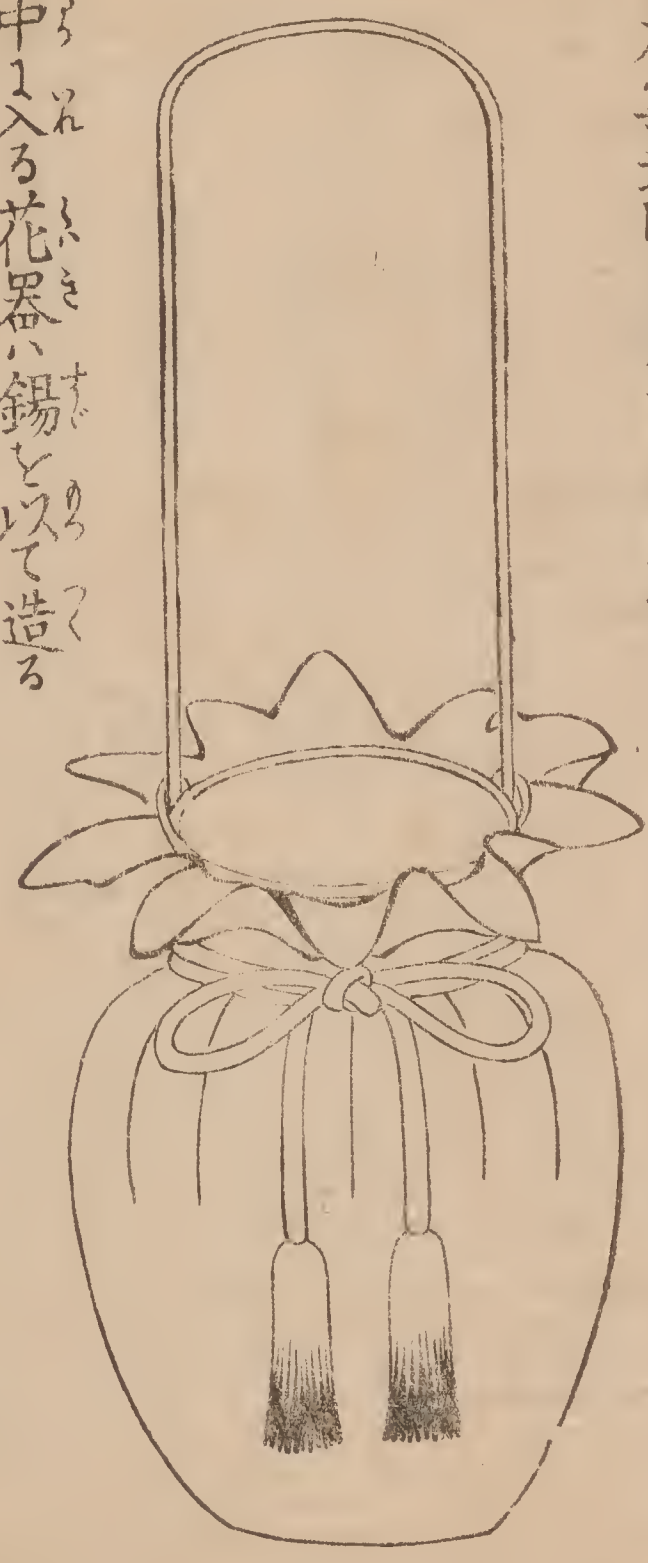


菜萸袋形花器之図

菜萸袋とも云

黄白の菊ト菜萸と拵

是ハ重陽ノ用ナル生花

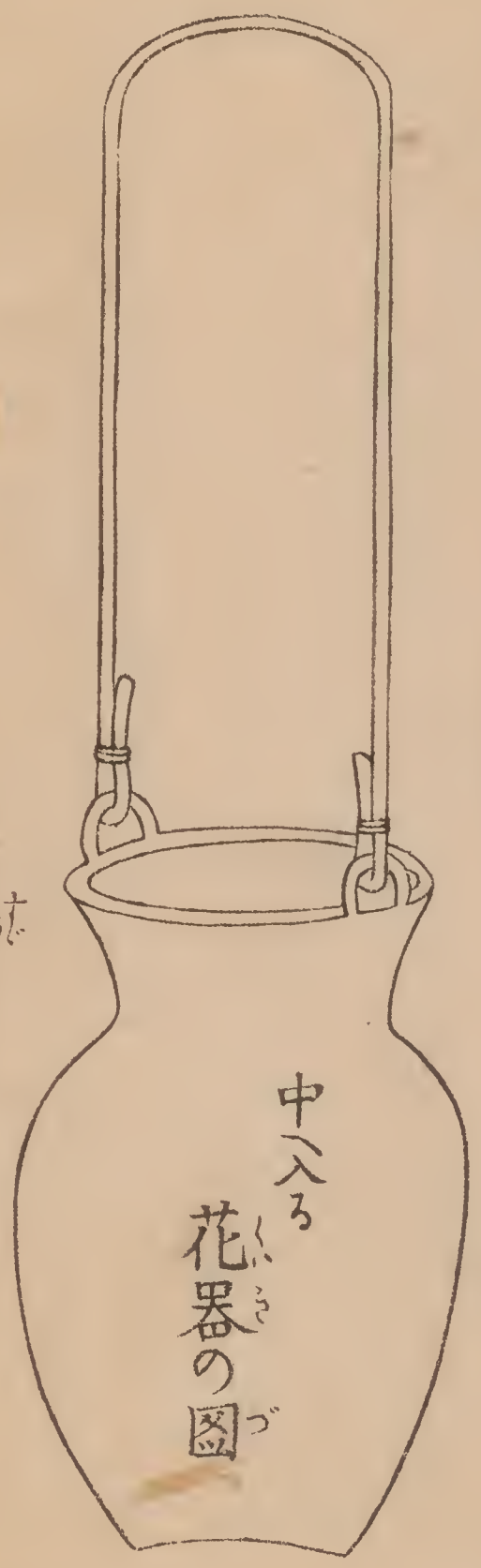


中ニ入ル花器ハ錫ト以テ造ル

代ハ赤地トシテ結びの紐釣糸ホ紫ト用也ト云結び方西ノ和合  
佐方ハ右雲トナハ袋紐トモニ紐ろきども當流ハ五色ト表一紫乃

紐用ルも同じ由菜萸袋ノ故事ハ五編ノ著ハセイウノ界ハ

袋の図



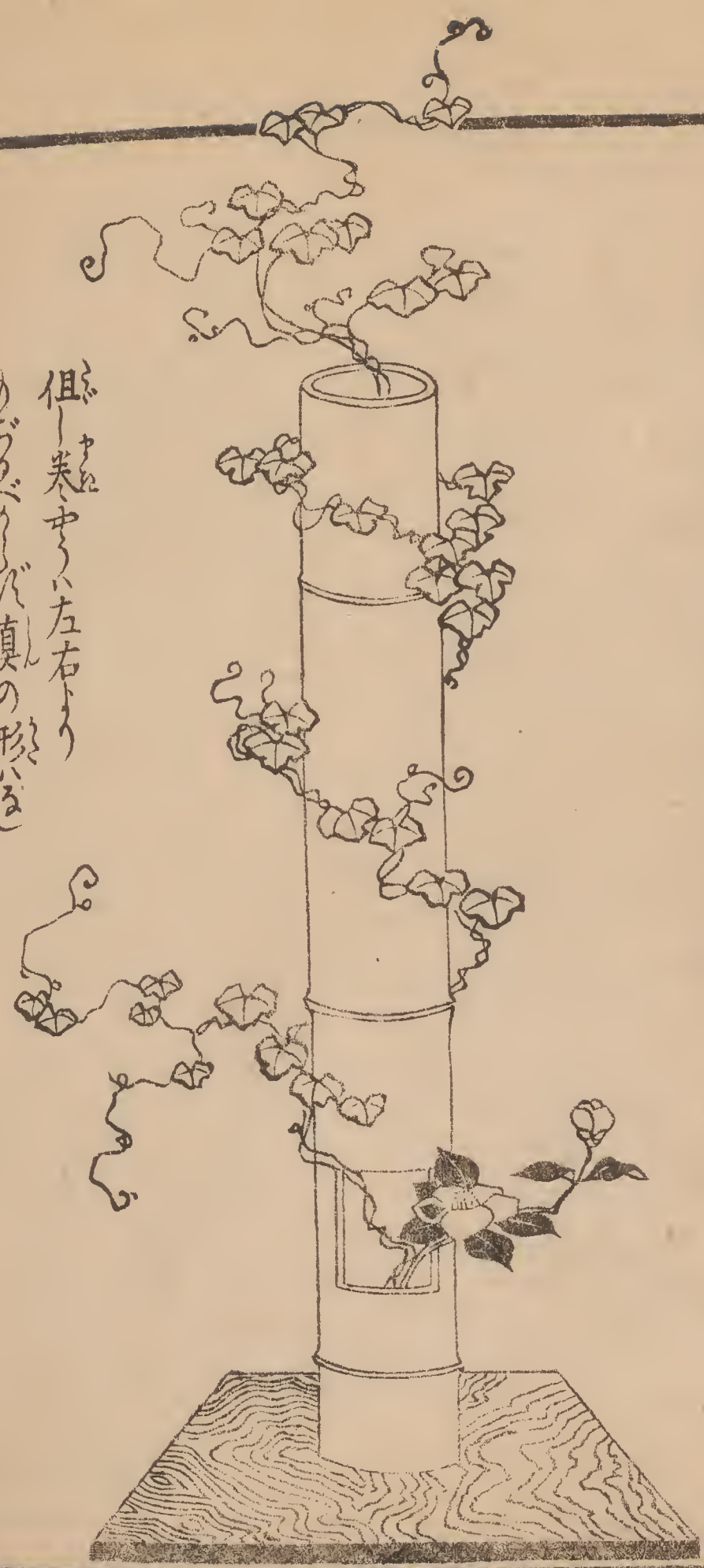
中へ入  
花器の図

右錫ト作ルト云



葛 椿

葛凡二本以上七九本心仕任ぐし大佛柱手桶ホ  
 奏つる時奏方心の表より出り奏数半丁ビ



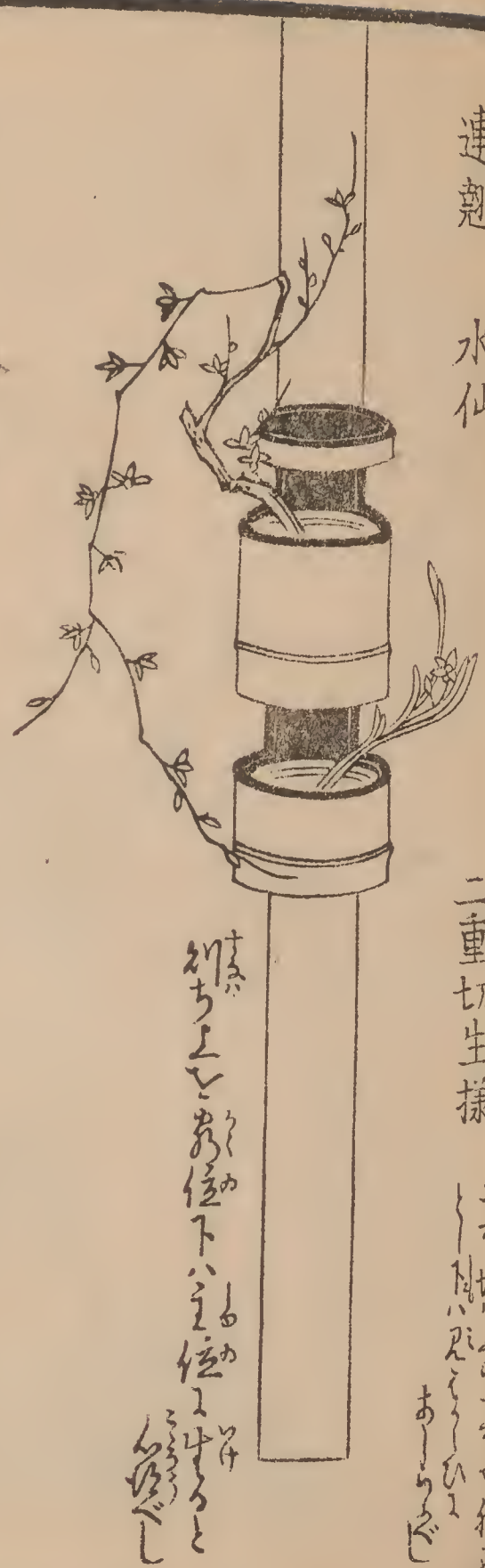
但し奏中より左右より  
 のどぶくば真の形は  
 づれも曲花と晒木をくく体すすビ

連翹

水仙

二重切生様

二重切生様の一寸とれ  
 八咫とくひ  
 あらうビ



初ちよとあ位下ハ位  
 くらうと  
 んび

中菊



此花はすこ  
 んがくれ

けは曲りんの花より  
 あらうとビ



○花器寸法大概 遠州流に用ゆる所

○竹筒凡そ胴ぐしと長と取らる説られども 一名相生獅子とも云

胴ぐしといひ割合とくくぐり  
故小尺のやうなりあまば八寸

切てととと云  
是と俗  
百度と云

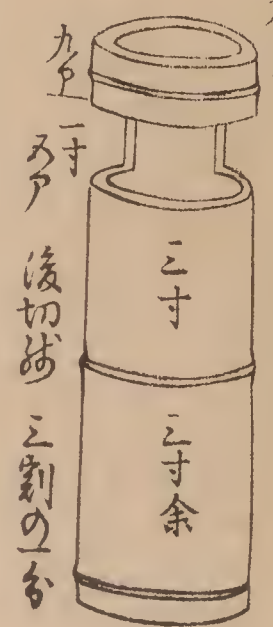
○二重切  
惣長二尺二寸

後さりのに二ツより  
一分と定法に  
上の口二寸下の口二寸八歩底は  
トートより九寸よりあは

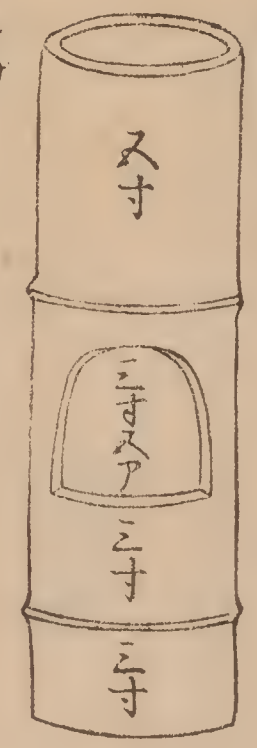


底のふり  
中れふり  
四寸五ア

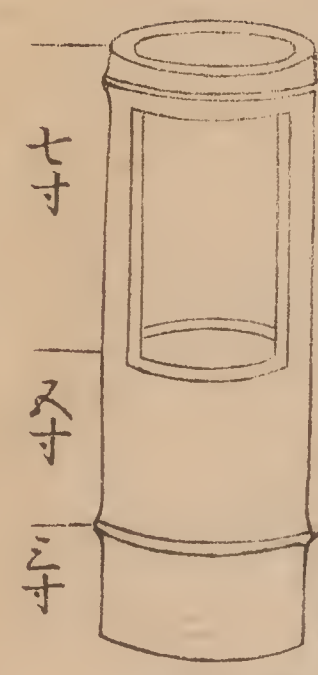
登獅子 惣長一尺



二重切洞

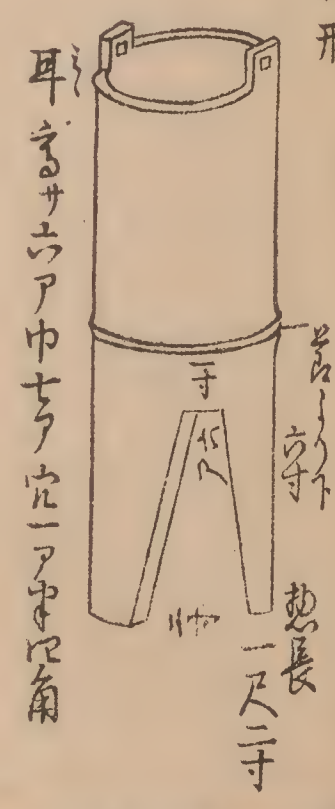


手桶 七又二

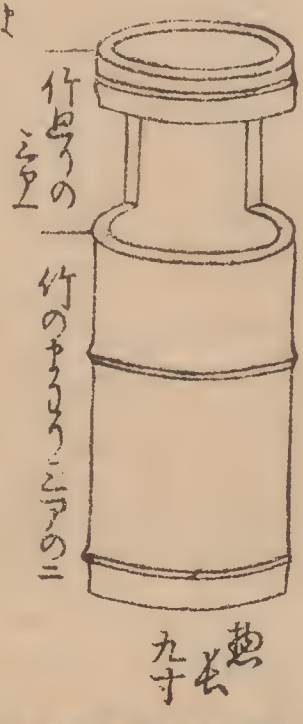


あ方のよハ  
九アの一  
のえ

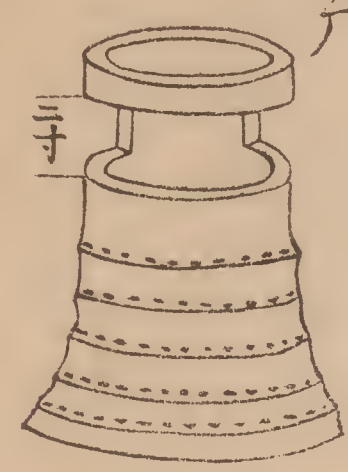
昇形



長袴



達

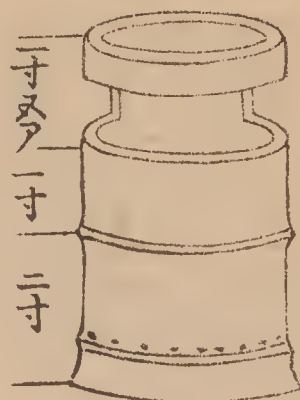


惣長サ  
七寸五ア

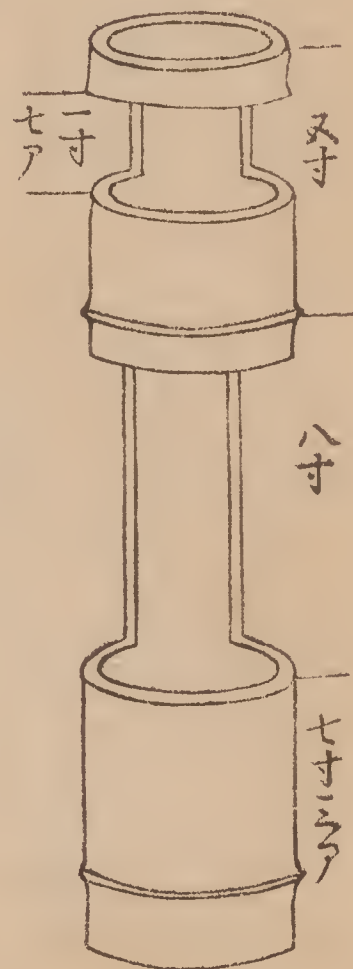


旅るやうく

あまほすろア



背せ継つぎ  
獅子しし



登のぼ猿ざる

天てん二に地ち六ろくとろ六ろく  
天てん一いち八はち裏うらがが〇

地ち八はち表おもてがが〇

裏うらがが〇 八はち陽やう

表おもてがが〇 八はち

陰かげがが〇 八はち

寸すん度ど切ぎ



長なが六ろく竹たけののやうよう  
二にツつリり二に分ぶんとと  
月つき由よしトとニに



末すえ竹たけとと作つくるる凡ふつ二に尺しゃくとと六ろく

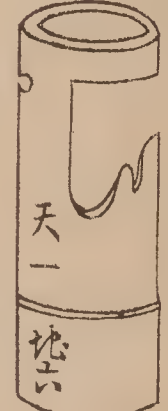
ゆりやう

天てん二に地ち六ろく

変かへ鯨くじら鯨くじら



鯨くじら

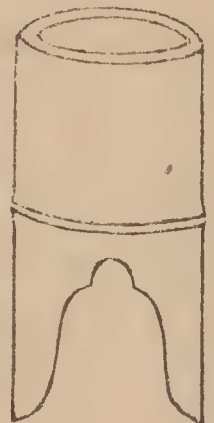


天てん蓋がい

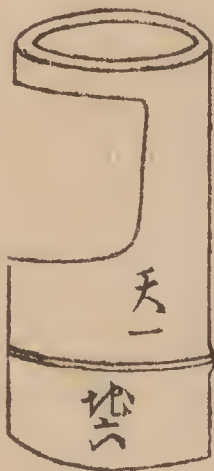


長なが六ろく竹たけののやうよう

琴こと柱ちゆう



ふりやう



大おほ六ろく分ぶん

長なが六ろく竹たけののやうよう

○竹たけ花はな器き七しち種しゆ飾しやく付つしし事ことつつてて花はな器きにに水みづをを入いれれ花はなもも入いれれ

飾しやくるるしし○柳やなぎ子こにに床とこをを入いれれ

○寸すん度ど花はな器きののやうよう○鯨くじら鯨くじら

花はな器きののやうよう○手て杵き同上どうじやう○二ふた柱ちゆう同上どうじやう○橋はし柱ちゆう同上どうじやう○二ふた重じゆう切ぎ

すいやうていりやうののやうようににかけかけ以上いじやう七しち種しゆああるるをを



○一説は竹の筒の花器、紹興までハ勝手の切溜へてぐき  
出たハ曾ておくむ利休なども同前るしが豊公相州御陣の砌  
利休彼地ハ於て佐の作意に竹の花器とより御茶とより上  
此時竹の本より一重切と二器末の方より百度切一器以上二器と  
作る此重切の筒ハひびた有由園城寺と号くあるまゝハ井  
鐘のひびたハ不洩て銘とせし寸度切ハ鳩胸と名づ鳩の胸  
とより似る所より由とぞ小田原の地ハとて竹の名物と今も  
城山の後ハ大竹よりて見事あると云ふもいと云

園城寺



利休作

惣長曲尺より一尺一寸二分半  
節二あり廻り二尺二寸五分二

鳩胸

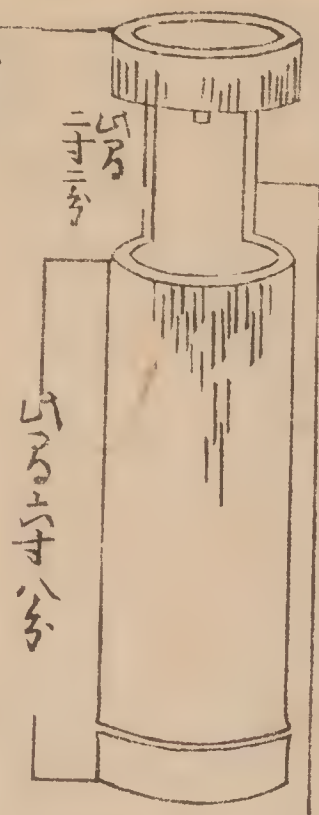


利休作

惣長八寸九分下のハより切溜へて二寸五分  
廻り一尺五分上面より二寸五分下ハ九環と打

惣長九寸分

同作

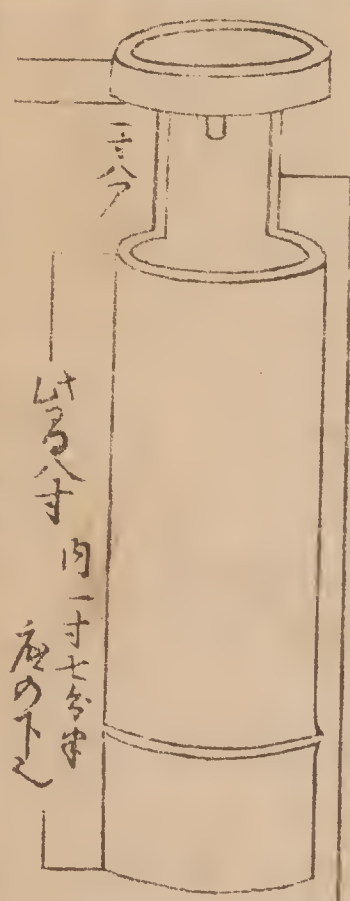


ハア

宗和作

惣長一尺六分

之内方ハ二ア外方ニアリ



ハア 内一寸七分半 底のト

後ハ残りハ二寸五分

上よりハアトハ折打ハ堅とハ後ハ

角九つびつ

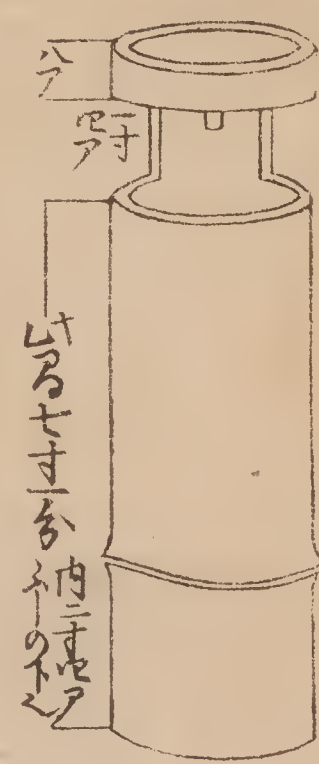
切残り二寸ハ

打穴上面より二寸ト

竹づれハ平身よりと云



宗甫作



惣長九寸二ア

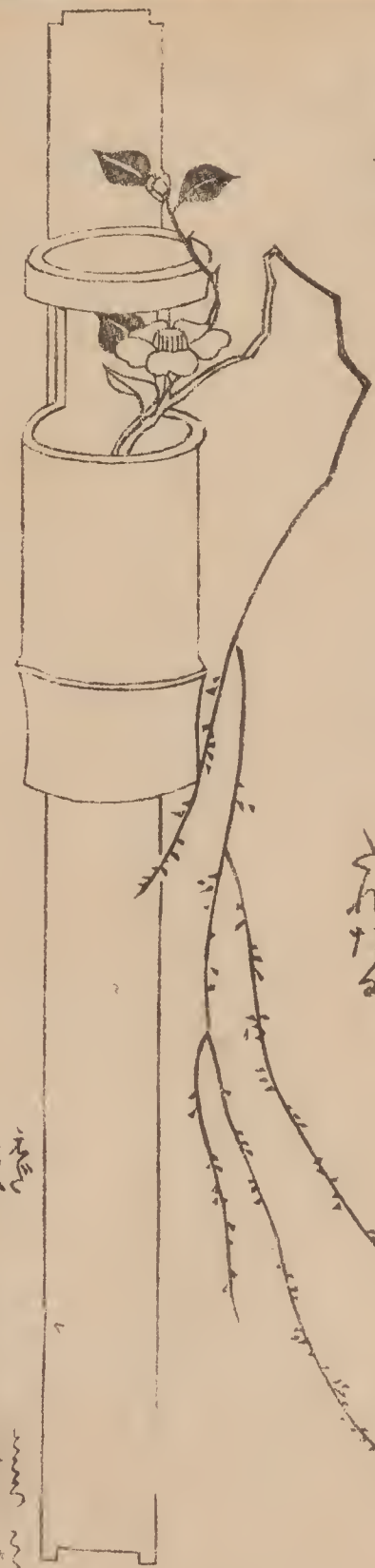
後切の口巾二寸七ア

メシ二分半

釘定 堅七分六リ 寸四分

糸柳椿

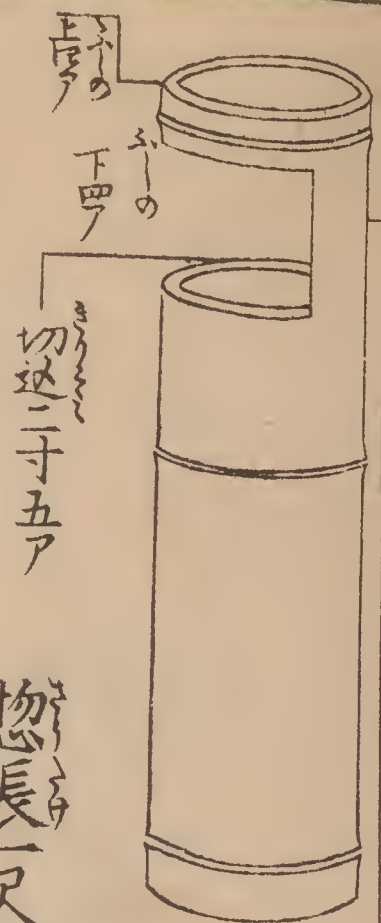
椿のつぼみと柳の  
こんなる



○一書小一重切の筒寸法ハ凡廻リ

一尺の竹を長と一尺四寸切込ハ惣長の四ツ割一分の長さ

又ハ二寸五分或ハ三寸寸も切込ハ



惣長一尺四寸 廻リ一尺の積

折釘穴上面より一寸目と心して  
長と七ア横四歩

四割一分切開くハ上月の輪に残り  
こまの内の寸小入る

○一重切釘穴貫通アハ掛花筒ハ決ハ半穴よりハ懸と掛

両用のなりあり切開ハ二寸四歩より五歩までハ獅子ハ云二寸前  
後と姥ハ二寸余至つてハ鯨鯨ハ然れども凡て一重切  
糸で通用有ハ或ハ獅子ハ事ハ千家ハ限るハもハ  
又寸と切開一尺の竹を凡長一尺二寸節の下寸より一名



竹の節切

経筒の頭切もつり

○二足の筒の如く一本の足と前向へた二足の花巻と思ひ  
り二足の花巻と是悲しく用や時ハ筒の足を

素五



二本前へ  
で向

○兼へて透ひて  
継りすべし

○尺八切ハ竹の節凡そ二ツ五ツまであり利休の切ハ  
長一尺八寸五フに九ツありし真の尺八の心より作り

見えて切べし凡そ長八寸より一尺八寸まで作り竹の太さより

尺八切



惣長 九寸七分

本の廻り七寸

銀付上の小口より

一寸五分下  
鉄のくしんを

右宗甫の作

一節切



惣長 九寸五分

竹の廻五寸

是も真の一節切の笛の如く小節とツツと切あり是ハ一ふし成竹と  
見えて切べし節ハ中よりサトアする方ハ小口より一寸五分下

淡の銀と打裏と折に内より漆とむく 右宗和の作

○一説ハ花窓の寸法右表より一寸五分又一寸分も云然れも是より

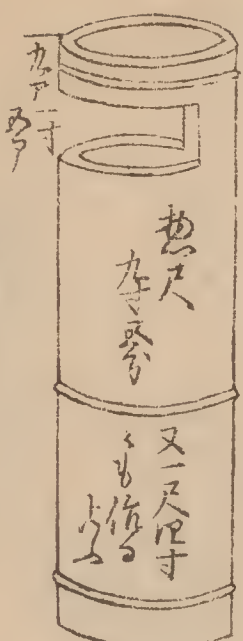
竹の節切



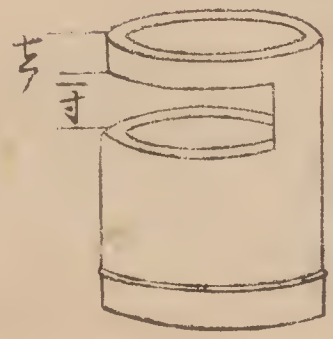
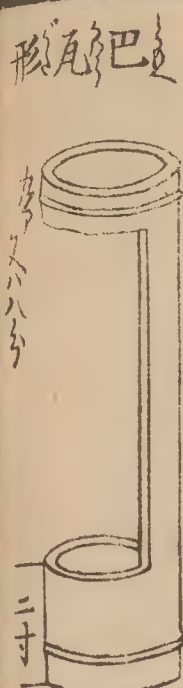
花入の物と故に大形二寸をてに切しつれども竹の見合せ第一  
あり後の切のじに古来より二寸五分より又人の取ずる竹乃身は  
厚さ二三分のにて見立は又人の取ずる竹の身は方へ随分削  
皮目の方一分より人取て見立下れり

石川流竹花器寸法大概

一重切 上より一寸下りて掛穴



惣長九寸



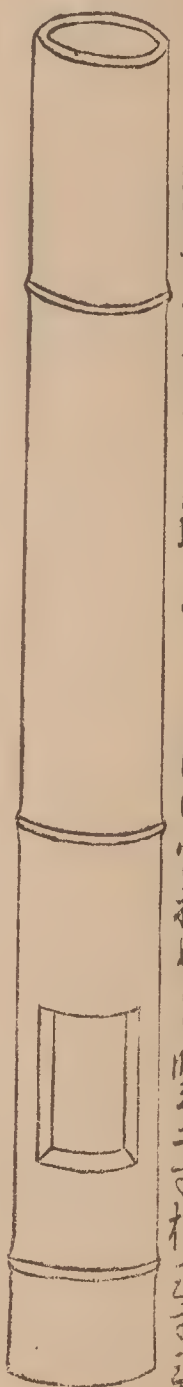
惣長二寸五分

細い

○根と以ては随分大竹に  
二寸より五寸まであり  
五寸以上はなし

大佛柱

又九寸



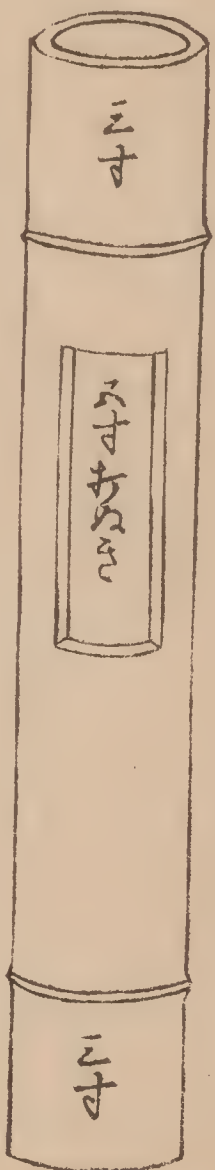
惣長二尺二寸

節三ツ

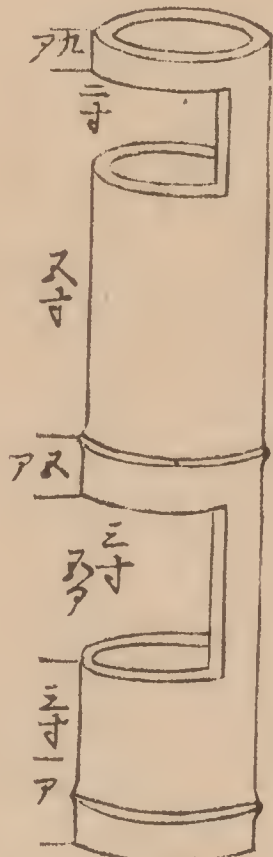
角の穴抜れと堅二寸横二寸五分

川童

惣長 一尺九寸



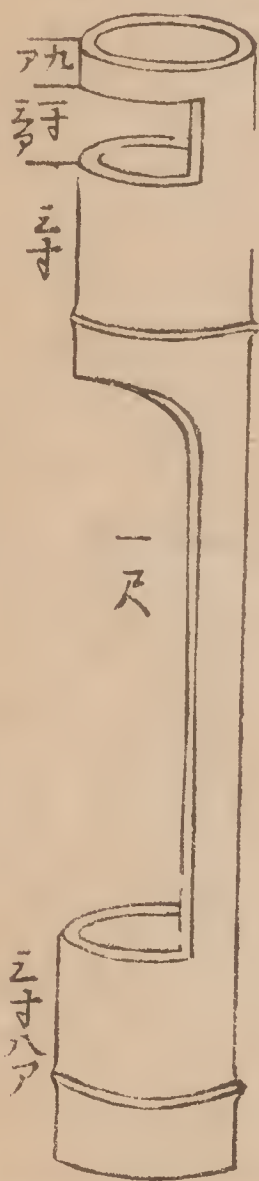
二重切



惣長一尺五寸五分

九山二重

惣長一尺九寸



一尺

二寸八分



達摩

惣長一尺二寸

竹の接よりて異七寸又九寸とも作るト云



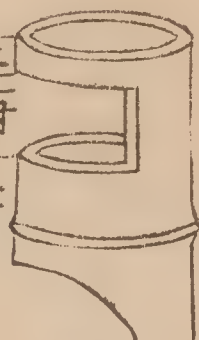
洞二重

掛穴

惣長一尺九寸

又洞二重

又洞二重



九寸 一尺二寸

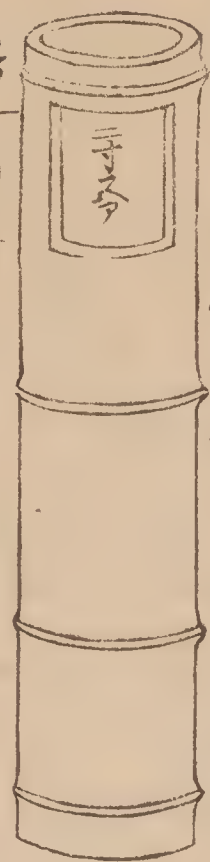


けり一尺二寸修より  
又二尺二寸修より  
作るト云

庸軒形

の廣さ一寸ニア

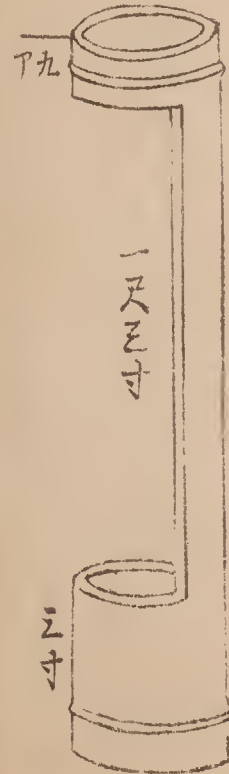
惣尺一尺二寸大竹のなりて切竹の拾好よりて  
長短時の宜しきやうに作るト云



カク

惣尺一尺二寸

掛穴



鶴首

一尺二寸

二寸

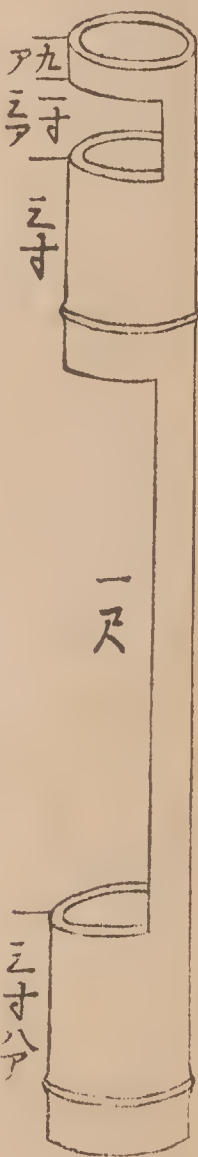
水杓

九寸二寸ニア 横二寸



高二重

惣長一尺九寸



ア九寸 二寸

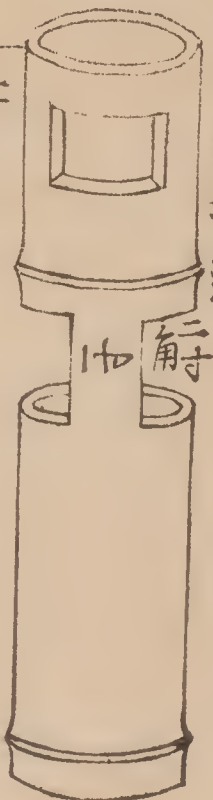
一尺

二寸ハア

槽二重

一寸アおね

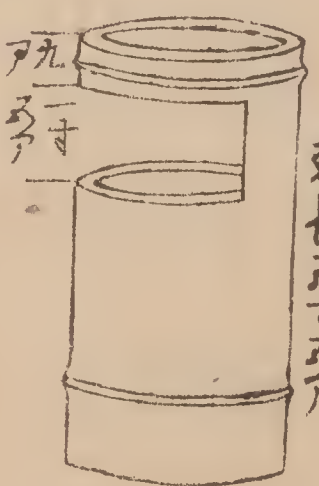
惣長一尺二寸



二寸より

二寸

枕旅



惣長一尺二寸

ア九寸

螢

惣長一尺二寸



ア九寸ニア

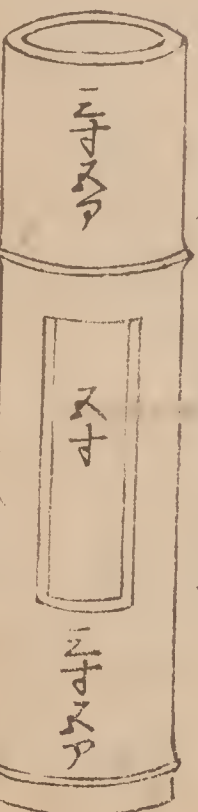
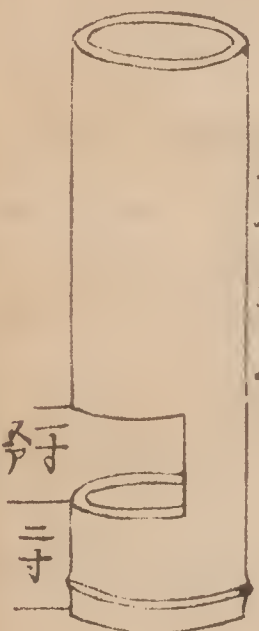
槁枕

惣長一尺二寸

寿老人

一尺二寸

惣長九寸ニア



二寸ニア

ス寸

二寸ニア

穴のより二寸ニア



おんべと云  
おんべと云



これとこれと一冊あると死



竹のむすつる  
壺掛あ用之

二寸

二寸ス

又寸

惣長一尺五寸  
下の南打柱又行拵  
トモも同じナドト云

す

二す

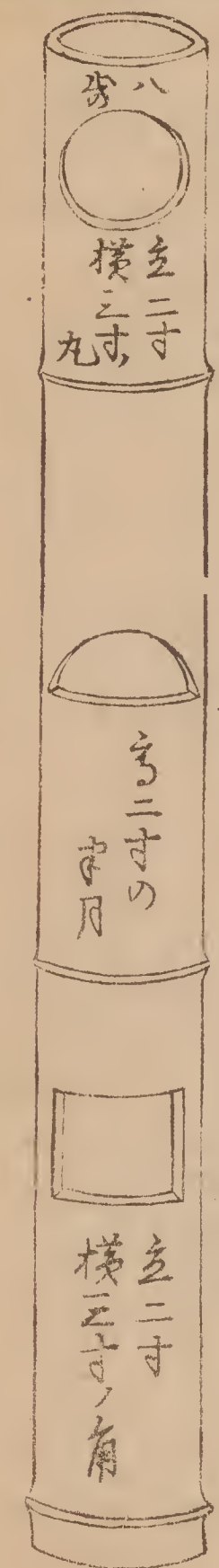
二す

すろろ

すろろ

すろろ

○一のあゝびよりて足らせ切じ



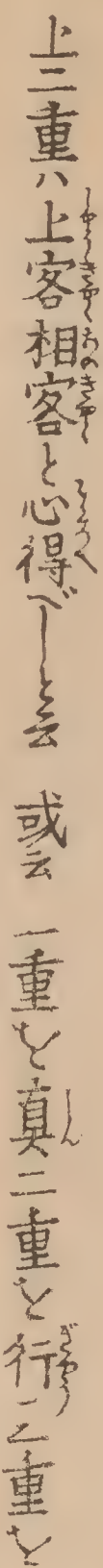


下ノ例ハ通例の一を切



上ニ重<sup>かさ</sup>重<sup>かさ</sup>紀<sup>き</sup>以<sup>もつ</sup>ニ重<sup>かさ</sup>切<sup>き</sup>同<sup>どう</sup>ト茅<sup>やう</sup>四<sup>し</sup>の鱗<sup>りん</sup>ハ立<sup>た</sup>ニナ<sup>な</sup>あり  
 我<sup>われ</sup>五<sup>ご</sup>の下<sup>した</sup>筒<sup>づつ</sup>ハ常<sup>つと</sup>の二重<sup>にかさ</sup>切<sup>き</sup>の法<sup>はふ</sup>を以<sup>もつ</sup>て切<sup>き</sup>ベシト也  
 近<sup>きん</sup>来<sup>らい</sup>石<sup>せき</sup>州<sup>しゅう</sup>流<sup>りゅう</sup>小<sup>せう</sup>此<sup>こ</sup>同<sup>どう</sup>を用<sup>もち</sup>ひべしと云

節ハ五節七節  
づれづれとも半一咸やう切じ



草と云ふ則これ竹筍の二体なりとぞ

○一説ふ五重切の筒ハ青竹の當座切あり書院の飾り大客の  
花よし遠州産の物好しそ伏見の大寺より庭前ハ大竹と  
即座に切せしれ折節春の花のふく有りやうせそ木も草も  
きて挿入のり山圖とせしうつて京の茶人秋乃草なる



早稲  
海  
松  
花  
柳  
竹  
梅  
水仙  
蘭  
菊  
牡丹  
芍薬  
海棠  
薔薇  
木蓮  
紫陽花  
桔梗  
朝顔  
曇子  
瓜  
豆  
菜  
芋  
蓮  
荷  
水仙  
蘭  
菊  
牡丹  
芍薬  
海棠  
薔薇  
木蓮  
紫陽花  
桔梗  
朝顔  
曇子  
瓜  
豆  
菜  
芋  
蓮  
荷

五十六

白梅

水仙

茅  
發柳



薄色椿

男松

或若松と取りかへ

中へ



青竹の筒 長さ五尺二寸  
床の壁に添へる薄板は常に常の板と敷く

早稲  
海  
松  
花  
柳  
竹  
梅  
水仙  
蘭  
菊  
牡丹  
芍薬  
海棠  
薔薇  
木蓮  
紫陽花  
桔梗  
朝顔  
曇子  
瓜  
豆  
菜  
芋  
蓮  
荷

五十六



むろろ中を御目かけ此内一色ハ花咲ぬ木の有へ事し  
仰傳ふれども是より極めて五重の下の筒へ松と挿る  
此花形の習いとさるなり

○一書云延附又柱隠しも号け七重或ハ九重一切筒のりあれ冬  
暑の時節も天井の縁より地敷まで床の内へ一色さるなり  
とぞ九ヶ所いれ花七ヶ所いれ花ハ五ヶ所挿るゝむじ黒衣の  
本堂におきて内陣の両楹專好の好くして一對かけき十夜法  
車に南天燭と種くしゆなり然るも早くもろじり木能  
寺の御影講此趣向を用ひ造花の糸接と挿て此方が前  
黒谷ハ後よりと争ひし事ありしかん本寺ハむろじりり両楹乃

掛筒なりて筒の中は毎年藤の造花と挿るゝなるも專好  
夫よりて思ひつれありとぞ

○一説一車僧と号け筒ハ篠一浮世と何より巡る車僧

一輪の内一有とろそ見れとろ

此哥と以て切筒あり

只常の口乃所と竹枝

太もろどん丸く明まり

上六節とろそ打やぐべとろ

其意ハ花何とろ一輪行義とけ其技と

外差出しと又一輪と答とせとじと輪の内一ありとろとぞ





早中時 花 七 編

○油筒細い八船に注ぎしるゝ出船入舟の差別なく又贈花と

あらはるゝはしるゝ是ハ利休居士のそめて好むゝと云

○律管のれハ官家の御好のハは樂器の調子と合

笛より思ひ付せるハ物数寄とぞりハハ堅

用ハ事しり堅ハ是時ハ管の高と

向ハは前トアハと云

ハ是ハ伐留同前の品ト

獨樂ト種ハの花と取入しるゝ

露より打ハ涼トて雲は座敷のハ花ハ用ハハ云

○畚二とどの細と付谷と隔て遥ハ山トりハハ云

かゝりて排トて薄板のかりハハ座ト用ハハ云

奇作ありと賞せしと云

此二輪と畚の形ト



畚花形

一説ハ此趣向ハ紫銅の舟ト極ハハ斯ハハハ云

○或云不風流の人接の繪の軸物とて遠州侯ハ花ト排ハハ云

趣向 花 七 編



所望せし壺水と入て色しとて是早速の奇作と

或寺院諸侯請待し御遠慮の状ありて御出なく花

見あふと有り也実りと思ひ御花見のついで御立寄有て

定まり池之坊に立花と頼まれに畏りて草木よりづ花

も用ひて皆深山より一瓶と摸せ草留と接草と論

多し御客も御感心ありとて是前より接の掛物と

壺より水とつきて色しとて同日の論あり

○昔菅谷何某とて士率牛花と愛し路次より書院の庭

のくは是と極楽とて或大守閑に見物し御越り

とて僕に庭の物数寄ると朝顔も御覧し御成有ん

然るに石一茶の湯し御成あり御出されむらじいん

申せし大守実と思し御使者とて菅谷茶道の達

人と閑及び明朝茶湯し御成ありとて菅谷かじけ

由領掌し朝の朝魚一本も残る皆掘すて待系す

大守早天とせのひて此よりさぬ其御不興ありて俄に飯

館もいれぬ思ひなく数寄屋しとて大なる竜の

今朝の花數十輪蔓葉凡五尺をりあて床の内を

はより大守大い御感心し御寝養ありて御中なる茶

同座閑し召りし花猶もさば殊更興を増しとて世未朝



白の茶の湯と名譽に沙汰らる。此時の事あり。一書に見えり  
按、豊公利休の宅に入をぬいし朝日の説も是と相似る双  
方別あり事るや後世傳へりや中々其是邪とまて成

虚瓶之図



右遠州庵の奇作なり入木せり一前に記し

龍見の観音の掛物不例の水瓶、柳枝ありし古入斯のて  
せしとて花器も水瓶も能取合てありに奇作なり



○送風鈴の花器、堂塔の檐よりけり宝鐸と送りて鉄の鐸と  
以て釣かり大徳寺玉舟和尚松は白藤をつとせ生れとぞ



早瀬 紫雲 七編

○子持筒、大小の竹を

根ぐさうつるだ

長短ふ

切く

有楽斎の物好より

いどやうとらう



金糸桃

長春

旅枕

朝鳥



朝鳥、枯枝、あまのこ、かき、て、挿じ  
水、さ、い、花、一、人  
必、ぐ、い、じ

梅

あんの幹、前、出、ぞ  
半、より、枝、先、し、ろ、の、ぞ、む  
体、の、さ、ろ、あ、ん、し、う、け、て、前、有



朽木

早瀬 紫雲 七編

三編





あざれ桃 金銭花

紺菊



栗島 花

鶴首



射干

寿老人

檜扇の操

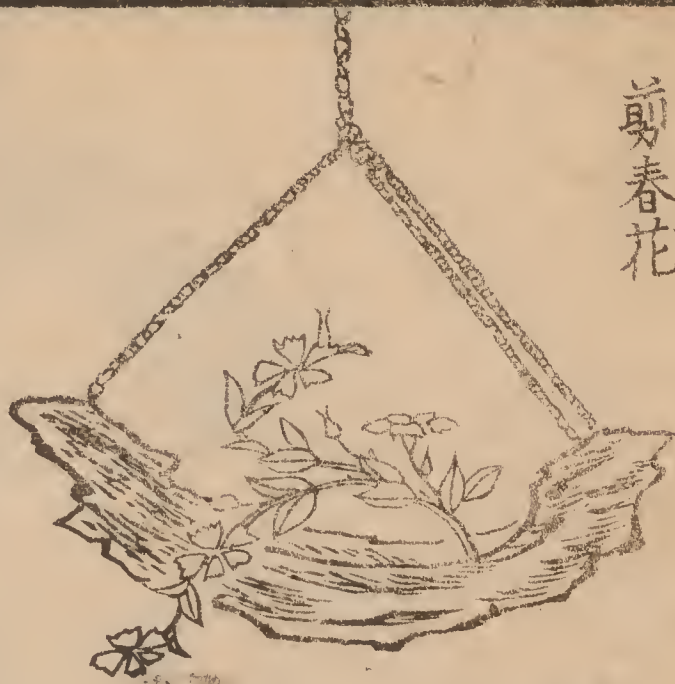
二名 出





早瀬 茶 七 編

剪春花



朽木船

索吾

狗子柳



狗子柳  
川柳  
又猫柳

山茶花 錦木 小菊

槽二重あぶ  
時よりて

上の二重と休も

色くば水なり

そりてびなもそのたハ

二重の生うたすび



早瀬 茶 七 編

二 十 二



○一説小重切上の輪、香燭を置くものなり故に見ざることを嫌ふ勿論の事又木より草と高くせざる時宜しうて若くは萩の類長て木よりも高く薄の木の小松を出るがごとく谷ノ様なりける木ハ草よりも低一定家郷の奇はあり

五山詩集より方々けと知れ流素見小松へしりてを

○又釣花器樹同掛筐の類小草花と挿並筒の類木の花は類いとする時ハ峯の草谷の木と心なり牡丹花と高くする事古歌なり武蔵野にる花とて誦むまゝ富士よりさきさき常夏はた那

○又水辺の草と木より上へける事ハ山の頂上は池ある心と以てせむむも其草に差別あり

○葉のみの品とせし時心と以て花は然し客位の花ハ木の花の

○一説は経筒の花器ハ佛事を用ひ祝儀小用のべし

○つるのものは花と挿るゝはは上座うてせむ

○竹とせる花器ハ鉄焼物のるゝ或ハ瓢とせし

○手ある品は花とせる時ハ花と挿るゝ手と持歩行ある持せむ

○手を見切き持てあり

○輪切しの二重切花とせる時上へ花と挿るゝ水より入る事ハ客と花と見る心ともいひ又客は花と入るを人爲なりと云西季もに上水より入れ下より花とせるゝを止しは事有時宜し

○惣じて花を見る床の脇よりする事と誤りゝ花とせるはづ



床とこ白しろ綾あやふるこそとこ足あしふふれろろふふ白しろ綾あやとちてとちて

中々なかなおむおむとと紫むら殺しととくく是こゝ人ひとののふふりりををかかれれよ

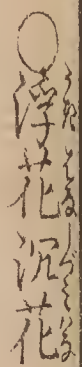
○花器を拜見するは花器の男内と

底<sup>そこ</sup>へ手<sup>て</sup>をあふとつけて見<sup>み</sup>返<sup>へ</sup>す

花器の外へ手をはきだす

きらふなり右の手ミガタと上左の手ウエヒダリ

下ろすに 桐客へ花巻と渡りて表と向て下ろす事と云ふべし



○浮花とて事其始

落梅浮澗水

待こころの心こころよりそ  
故こ人ど

梅花と廣珍砂盤の

類の水は浮き上りて

夏なつ日ひ々々暑あつのなつ石いしハ水みづ盤ばん不ふ

石竹の類いぶせりんは小輪こりんにて葉はは

花を五七輪水ぶくろめ

客前きやくぜんに於おて食應しょくおうふ

砂盤六亀の図

惣高サ足トモ

七寸五分

是寸

足ツ

愬地紋

五

龜甲





又月五<sup>ご</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>の<sup>の</sup>窓<sup>まど</sup>が<sup>が</sup>見<sup>み</sup>え<sup>え</sup>て<sup>て</sup>蒸<sup>も</sup>か<sup>か</sup>る<sup>る</sup>で<sup>で</sup>こ<sup>こ</sup>方<sup>かた</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>だ<sup>だ</sup>

えんきょうが  
楠牡若の類い  
うづ  
まゝ  
こみすんちやう  
皆水中に入る時ハ花を損ひ萍蓬独り

水中みづう花尚はななほふさふさし

○花と挿る小花配子を用捨すべし心得あり唐物和物とも二名

磁器塗物のてふ君分花々々々々用也々々但一花より々々

水際みづぎはのまよりみづより遊あそぶは是こゝ水みづあぐ配はき本もとと入いるゝ此時このときハ花はな盞せん此こゝ損こぜぬ

やうに紙と砂を緩く入れし

○曲留図式

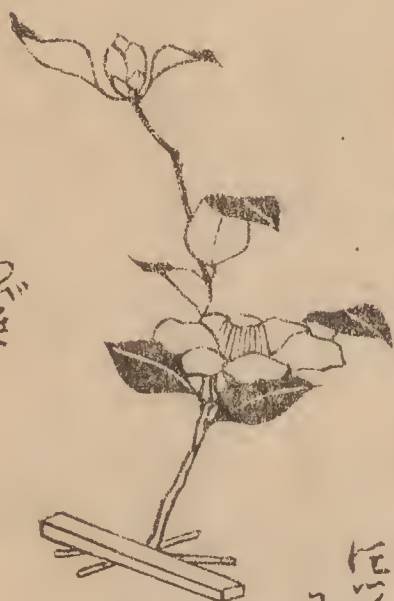
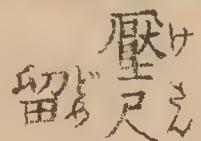
太蔕うゑ  
小刀留こやいゑ

つかへてゐる。でも、そろそろあつたりの、けの、ぐう、ぐう、ぐう、  
 結びて、ぶくろ、ま、糸、け、んの、お、ひ、そ、お、り、に、ぬ、じ、



鉄留圖の

本業と小売の間に、果のどろどろも



椿



偕えい老い草ね



○一説小柄の始原ハ織部公利休方へ茶會し御出りて會  
 後庭前見事ある太蔭のりりと御覧どて賞翫ありと利  
 休其太蔭を切來りて織部公へ花を御所望申る花器ハ會  
 席の太蔭食次に出る織部公より小柄と太蔭成に  
 貫き小刀の鋒を出し食次へ差こみ御生けりと利休大  
 感心奉りしとや又利休の小刀挿るハ花切の小刀と存  
 ぞとけしとあり是小刀つけの盥觴ありと云

○同小柄井より織部公遠州公へ御出りて會後遠州公  
 御たづひ有るハ床より梅へ小柄留しつと候て然るやと  
 有し黒塗の盥小柄と梅と差貫は小柄の鋒と盤  
 へ込押へる井より梅の人は小柄留の始なりとぞ

小柄  
并留



○又唐生ハ織部公

御慰不縁側より黒塗の盥



浦と剪春花を唐にて拵ゆより始るはを唐ハ盥入にけりハ  
 外へ出しをききとぞ後世唐の組方と工夫し其形よりて名を蒙ら  
 せりを唐より小柄よりあは貴人清侍の席ハ遠慮とぞ  
 古昔ハ花器とぞとれ花留あはつる具も調はざりし事斯のぞし  
 追て工夫とめざりし今のぞくハ

備留

花昌蒲

銜留



〇銜の組方種いかり

鎖留

瞿麥



根とくさくさて幾重も  
 ちとむて  
 とむビ

砂利留

小トヤマとくさく



翁草

山菅



石とらハ

花おとる

中ふとんて

ヌツハツとせと根と

牡丹草

あり

あり

あり

あり

あり

あり



10

七  
五  
一

三

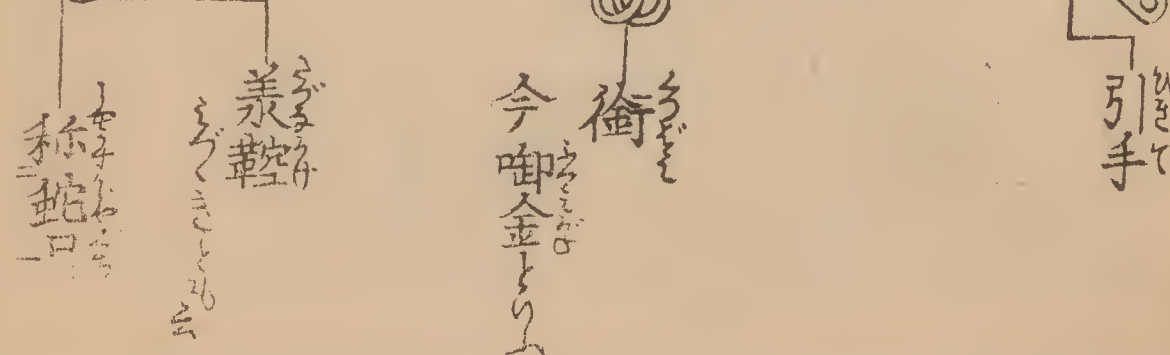
銜

今略

分

去革  
とづき

稱蛇





畧して其名高きものとてうゝ出

流義よりこれを用ひてあり

○銜組方々図

○男亀の頭の頭と前より

並べて行羽と両方打重絲

双方内の方の穴を揃て

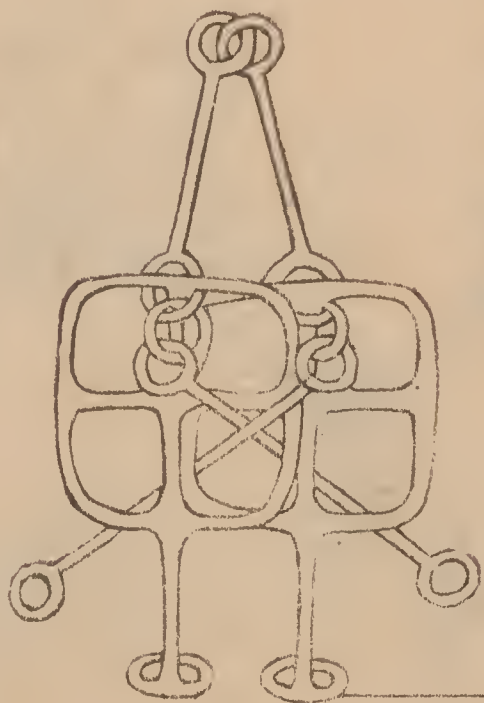
重子此穴へ手細掛と両方

行遠ひ入て双方張せて止る

○女亀の紐方ハ男亀と同じ

頭と両方へ引遠として重の

手細掛けたり男亀の通り穴へ入る



男亀

銜のうゝ

女亀



只頭と行遠り入の

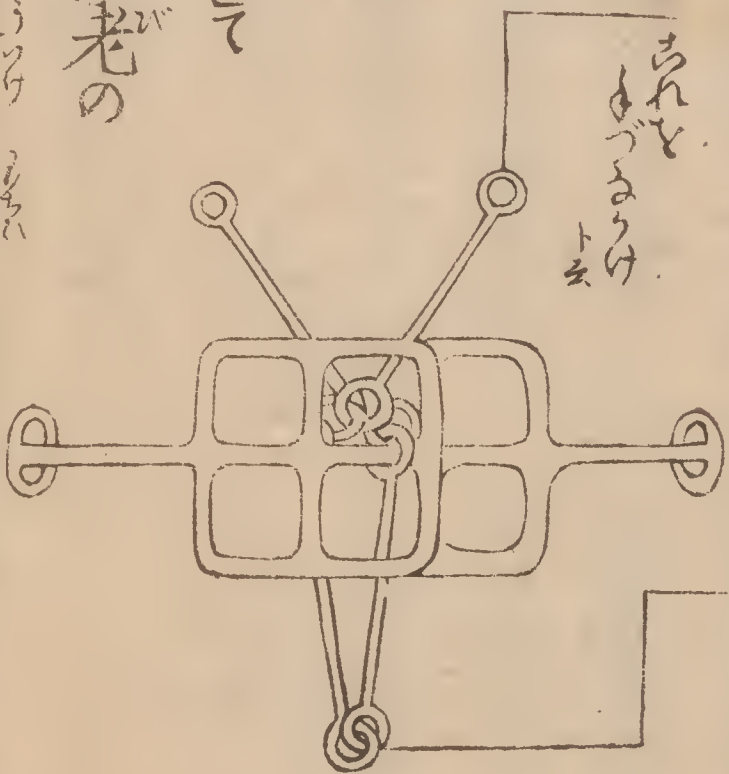
○海老ハ図の

銜の尻と重の合せて此重の

穴へ一方ハ手細掛と行遠ひて

やれ一方ハ合金と出して海老の

足と此組方ハ巾着の魚道に用ては



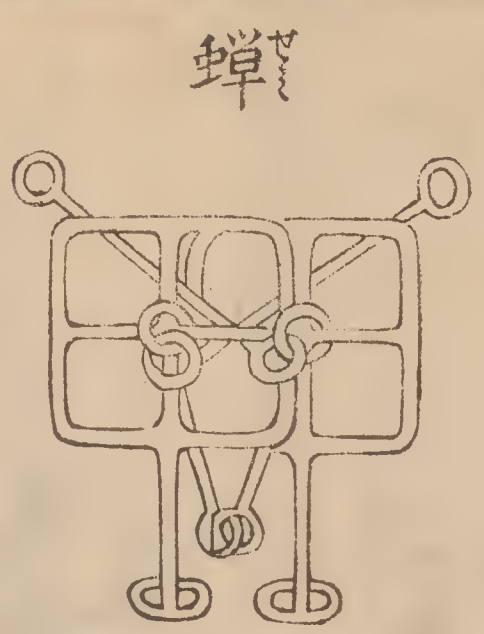
海老

合金の



早稲 七緒

○蟬 号々 紐方ハ男亀と其まゝにして合金を前かゝりて前  
 らし手細うけと其まゝより後へ引なり

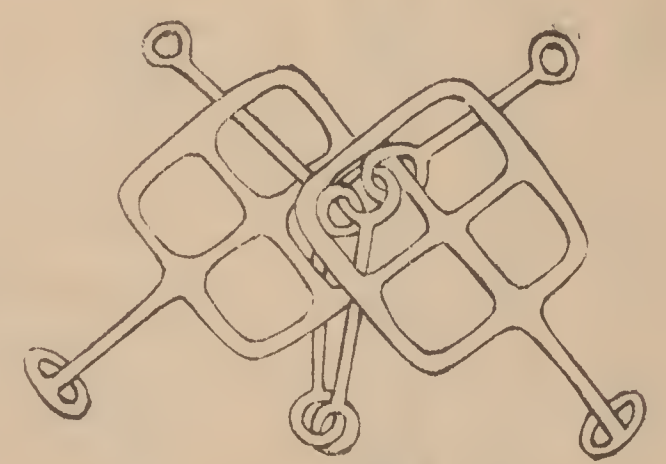


○蟬と号々よりハ女亀と蟬の如く含  
 金と前かゝり手細うけと後へ引  
 ○蟹ハ左ノ面より右ノ面と斜に  
 手細うけを二箇の中へ入ね合金と前  
 かゝり此合金の穴にうけの先と  
 留る其ぞ堅くして花と入るよし

蟹

○御幸とらるハ雪の頭と前ハ様とらる打金と手細掛と行遠  
 下とトより合金と以て押堅むるあり凡御所車の形あると

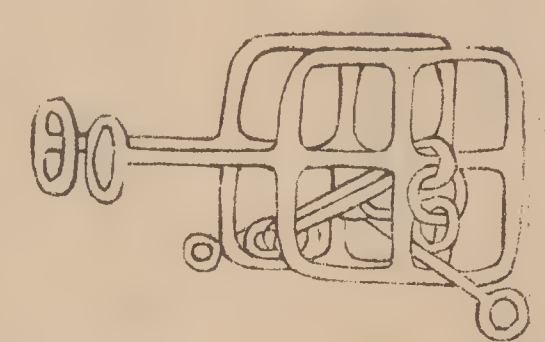
りて御幸と号々より



富士の影

御幸

○不二のうげハ銜の頭と打遠と



合金の穴ハ此頭と入る手細うけの口ハ両方の雪の下打ちて  
 らし是ハ薄鉢ありのうすねりの入る水中に蔵てしき

早稲 二編

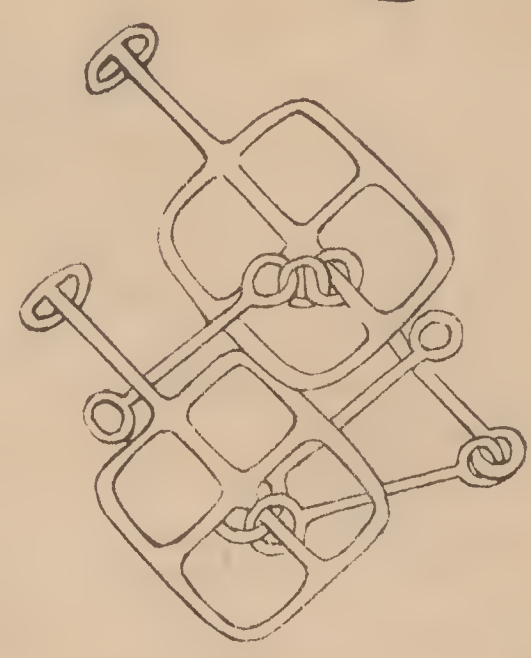
三十一



早稲 七緒

組方ありむ小づつと組む

雙亀



○雙亀の図のてく向ふ出る亀  
已手細くけと以て後のかめの  
首より後の亀に已手づる  
掛と以て已内の横腹をかめて  
あせと止る

○銜と組ぶと組む時左より組む

○草物葉物と組む一本つゝ入る大てん花のうりどに

り葉もたんゝ重紐で一塊とて官に挿し然るされ銜  
とて安んず挿しにあらねど一塊りゝハ風流の

景出来ぐれ事あり此時ハ先より花もちり葉も

あれ胴体と過半入とて唐をかゝる夫よりばんと摸掾付

下銜全く鑄つけし龍蟹の類ひと組むものあれ其

心得のび又本物の蟬の組方のおれ小穴の銜入きては

魚道ハ海老のてんてん度と組方よし

○銜穴大として花詰りがれ時見ざる中穴込と入れし

りゝハ膝入て切株の体に見せるもよし然るも願ふ

あゝ入るにあらは時の宜れと随ふべし

○掾とあてて風のりり強と所とて唐を堅く組む

花も随分かく挿し頭重の長高の用捨とてし



早稲  
な  
七編

三十一

時よりて花勝て保ちがたふ大の蟹を以て上よりあそ  
とむし御幸の組方あふ甚ど堅かばと保ちがたし  
随分かられものを入き重きもの入でて  
○千害と手細掛行一方はとて此の組方なし  
其時より勝手に止し  
尚此より洩る秘事に傳ふ八編より委しく出に

生花早満奈飛七編 畢

攝港 鶏鳴舎曉鐘成編輯



生花早學 自初篇至十篇 都合十冊 成刻

嘉永四年辛亥六月發兌

大阪心齋橋筋南久寶寺町

書房 伊丹屋善兵衛梓



